
ハードボイルド・エレベーター

水守中也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハードボイルド・エレベーター

【Nコード】

N4101L

【作者名】

水守中也

【あらすじ】

エレベーター内に閉じ込められたハードボイルドな男の物語です。ギャグです。

ハードボイルドが本当に好きな方は見ないでください。

エレベーターが止まった。

目的の階に着いたわけではない。いわゆる非常停止ってやつだった。

エレベーターの中にいるのは俺一人だけだ。階数を示すランプを見ると、4階と5階の間で止まっている。動き出す様子もなければ扉が開くこともない。

ふっ。だが、男はこんなことであわてちゃいけないぜ。

地震か、何かのトラブルか不明だが、揺れはない。突然落下する可能性は低いと考えていい。

俺は冷静に、両手に持つ袋を置くと、非常用ボタンを押した。しばらくしてスピーカーから声がした。

「どうした？ 何かあったのか」

「おいおい。用もないのに非常用ボタンを押すほど俺がやんちゃに見えるかい？ 何かあったにきまっているだろう」

俺は状況を説明する。しばらくして、返答があった。

「すまん。どうやら電気系統のトラブルみたいだ。いま整備班を向かわせている。少々待ってくれ」

「オーケー」

ふっ。ハードボイルドな俺にトラブルはつきもののようだな。

俺は慌てず、ごく自然に休めの型を取った。さて、どれくらいかかることやら？ だがラッキーなことに、俺はスーパードリットだったのさ。おかげで食料には困らない。その気になれば、何日でもこもっていられる。

それにしても暑いな。中にいるのは俺一人とはいえ、少々暑苦しい。俺は上着を脱いだ。ついでにズボンも脱ぐか。公衆のエレベーター

ターの中で全裸。ふっ。倒錯した恍惚だな。

「おいっ。一応監視カメラついている。変なものを見せるな」

マイクから流れてきた声に、俺はトランクスに掛けていた手を止めた。

なんだとっ!？ 危うく俺の究極の肉体美、散弾薔薇を披露してしまうところだったぜ。

俺は口笛を吹きつつ、何事もなかったかのようにズボンをはき直す。あくまで自然にな。さりげない動作で腕時計に目をやって、俺は目を疑った。なんてこった! 閉じ込められてから、もう5分を過ぎているじゃないかっ。

俺はマイクに向かって、抗議した。

「はっはっは。整備班とやらはずいぶん道草がお好きなようだな」

「悪い。たったいま出たようだ」

「——おいおい。そば屋の出前かい、ベイビー」

怒ってはいけない。あくまにクールにだ。ちらりと脇に置いたエコバックに目をやる。牛乳がある。そうだな、カルシウムでも補給するか。喉も渴いていたからな。コップはない。男は直接口飲み。もちろん片手は腰に添える。

ふー。一息つく。

牛乳は半分残した。救助がいつ来るかわからない。貴重な水分を無駄にはしない。基本だぜ。

しばらくして俺は焦り始めた。

恐怖? おいおい。そうじゃないさ。その、ちょっと——もよおしてきたのだ。はっはっは。……ってちょっとヤバいな。

今の俺は監視下に置かれている。下手な動きは見せられない。

ちらりと視線をさまよわせた先に目に入ったのは、またしても牛乳のパックだった。そうだ。この中に俺の溜まりきったものをぶち込んでやるか? だがそうになると、残りの牛乳は、尿オレになってしまう。

ふっ。ならばやることはひとつしかないな。

俺は牛乳の残りを一気に飲み干した。おおっと。一気に水分を補給したせいか、尿意が増してきた。おいおい、落ち着きなベイベー。まだ出るには早すぎるぜ。

空の容器を置くと、俺は監視カメラに背を向けるようにうんこ座り。素早く右手を一閃して、社会の窓を全開にする。そしていきり立った、いちもつを牛乳パックの三角にぶち込んだのさ。

勢いよく、溜まっていたものを放射する。派手な水音が響き渡る。やばい。マイクで音を拾われる可能性がある。

「おい、どうした。なぜいきなり歌を歌う？」

「ふっ。俺の心に、ロックの覇王ジョン・ケイミイが乗り移ったのさ」

俺は歌う。祈るのさ。尿の勢いが収まることを祈って。大丈夫だ、落ち着け一リットルなんて出るはずがない。そうだ、いいぞ。その調子だ。……よし、止まった。いい子だ、我が息子よ。

牛乳容器がたぶたと音を鳴らす。人肌のぬくもりが伝わる。はっはっは、どうだい、一杯飲んでみるかい？ 牛乳パックをエコバツクに戻そうとして、俺は重大なことに気付いた。そうだ、俺はアイスクリームを買っていたのだ。ラクトじゃないモノホンさ。このままだと溶けてしまう。

オーケー？ ならばやるこたあひとつしかねえな。スプーン？ ふっ。そんなお上品なものなんてねえさ。男なら手づかみよ。

俺は蓋を開けると手で掻き耑るようにアイスを食い漁った。くっ。頭がツーンってしてきやがった。ガキのころを思い出すぜ。

俺は勝った。完食してやった。だが、ほっとしたのもつかの間だった。俺の可愛い腹の虫が鳴った。空腹の合図じゃねえ。これは……雷の予感……っ！！

ちい、牛乳が腐ってやがったのか？

オーケー。俺は大丈夫だ。

幸いなことに空のアイスの容器がある。この中に内蔵物をぶちま

けてやるこたあできる。だが今回の彼女はちよつとじゃじゃ馬かもしれない。へたすりゃ収まりきれない。そんなとき、目に留まったのは、レトルトのカレーだった。適度にブレンディーすれば……見た目も匂いも誤魔化せる。

オーケー。俺は大丈夫だ。

「おい、何をやっている、アイスならまだ分かるが、温めもしないカレーなんて」

「いいかい。男にはカレーを食わなきゃいけない時があるんだぜ」俺はレトルト容器を引き裂いた。スパイシーな香りが密室に充満する。オーケー。計算通りだ。あとは俺の（ぴー）とともにぶちまけるのさ。とてもデンジャラスなカリーの出来上がりさ。はっは。

オーケー。用意はいいかい？ 3、……2、……1、

フアイヤー、と言いかけたとき、突然エレベーターが上昇し始めた。ベルトに掛ていた手を慌てて離す。エレベーターは、無事目的の5階に到達した。扉が開く。

どうやら助かったようだ。

俺は外にいた作業員たちの謝罪を寛大にいなし、エレベーターを出る。罪を憎んで人を憎まず。黄色い牛乳と開封済みのレトルトカレーはエコバックの中に押し込み、何事もなかったかのように、風のように去るのさ。ふっ。小市民を演じるのも楽じゃないな。

おおっと。別に便所に向かって急いでいるわけではないからな。

え？ オチがないって？

はっはっは、何を言っているんだい？

エレベーターは止まっただけで、落ちはしなかっただろう。

いいか、もう一度言う。便所に向かって急いでいるわけではないからな！

(後書き)

笑えるだけの話を書いてみようと思いました。
すみませんでした。

非常ボタンを押したらどうなるのかは知らないので、そこは想像で
書きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4101/>

ハードボイルド・エレベーター

2010年10月8日12時13分発行